

安息日をどう考えますか

ヨハネ福音書5:9-18

【新改訳2017】

- 5:9 すると、すぐにその人は治って、床を取り上げて歩き出した。ところが、その日は安息日であった。
- 5:10 そこでユダヤ人たちは、その癒やされた人に、「今日は安息日だ。床を取り上げることは許されていない」と言った。
- 5:11 しかし、その人は彼らに答えた。「私を治してくださった方が、『床を取り上げて歩け』と私に言われたのです。」
- 5:12 彼らは尋ねた。「『取り上げて歩け』とあなたに言った人はだれなのか。」
- 5:13 しかし、癒やされた人は、それがだれであるかを知らなかった。群衆がそこにいる間に、イエスは立ち去られたからである。
- 5:14 後になって、イエスは宮の中で彼を見つけて言われた。「見なさい。あなたは良くなった。もう罪を犯してはなりません。そうでないと、もっと悪いことがあなたに起こるかもしれない。」
- 5:15 その人は行って、ユダヤ人たちに、自分を治してくれたのはイエスだと伝えた。
- 5:16 そのためユダヤ人たちは、イエスを迫害し始めた。イエスが、安息日にこのようなことをしておられたからである。
- 5:17 イエスは彼らに答えられた。「わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです。」
- 5:18 そのためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っていただけでなく、神をご自分の父と呼び、ご自分を神と等しくされたからである。

【祈りながら考えよう】

- (1) ユダヤ教で安息日はどのように守られていましたか。
- (2) 安息日について、主は何と語られましたか。
- (3) 安息日は何を意味していたものですか。その本体は何ですか。

【解説】

(1) 安息日をどう考えるか

安息日をどう考えるかは、重要な問題である。ある人々は、日曜日を安息日と考え、律法通り、この日には何もしてはいけないのだとして、万難を排してもこれを守ろうとする。

一方において、安息日などはもう存在しないのだとして、未信者と同じように日曜日を考えている人もいる。また、そのようなことについて、全然考えたことのないキリスト者もいる。

旧約聖書では安息日は土曜日であったが、「イエス・キリストが復活した日」「聖霊降臨が起こった日」は、すべて「週の初めの日」すなわち日曜日であった。このため、初代教会では、ヨハネの黙示録1章10節の「主の日」に基づき、キリストの復活を記念し、日曜日を「主日」と呼び、主の復活を記念してパン裂きを行うようになった。

ローマ帝国において321年3月7日、ローマ皇帝コンスタンティヌス1世が日曜休業令を發布して安息日を取消し、日曜日を礼拝日とした。ところが、セブンスデー・アドベンチスト教会は、安息日がローマ人によって変更されたのは聖書の教えに反すると考え、安息日(土曜日)礼拝を守らなければ真の教会ではないと教える(SDA所沢キリスト教会等)。

(2) ユダヤ教における安息日の守り方

出エジプト記20章では、神が天地創造において7日目に休まれて、この日を祝福し聖であると宣言したゆえに、安息日を覚えて聖なる日とし、労働してはいけないことを教える。

また申命記5章では、神がユダヤ人をエジプトの奴隷状態から連れ出して休みを与えたゆえに、安息日を覚えて聖別し、労働してはいけないことを教える。ユダヤ教では、安息日は、神が天地を創造したことを覚えるとともに、神がユダヤ人の歴史を救い、ユダヤ人が神の民であることを覚える記念日である。

ユダヤ教の場合、彼らは安息日を守るということについての「細則」を作り、それを守ることが、安息日を守ることになるのだと教えていた。ユダヤ教の教典であるミシュナーという本のシャバット(安息日)篇には、安息日にしてはならない労働のリストが39挙げられている。その中に、「どんなものでも運搬してはならない」(シャバット7章2節)と記されている。

また、エレミヤ書にある「主はこう言われる。あなたがた自身、気をつけて、安息日に荷物を運ぶな。…」(エレミヤ17:21)という特別な個所を例に挙げて安息日厳守を主張していたのかもしれない。

しかし、これらの個所を、ベテスタの池でいやされた人に当てはまるのは、問題である。なぜなら安息日に商品を運ぶことと、突如、奇蹟的にいやされた病人が、家に自分の床を運び帰ることは全く違うことである。

前者の荷を運ぶのを禁ずることは聖書的であり、律法にかなっていた。しかし後者を禁ずることは、モーセの律法の精神に反する。

今日、日曜日を安息日と考えるキリスト者にも似たところがある。日曜日は安息日だから、何もしてはいけないと言って、仕事も勉強もしない。

礼拝よりも仕事や勉強を優先し、礼拝を休んで仕事や勉強をしている人々よりは、はるかにましであるが、これが行き過ぎると、土曜日の夜中の12時直前までは仕事や勉強をし、また日曜日の夜中の12時が過ぎると、とたんに仕事や勉強をするということになりかねない。現にそうしているキリスト者もいる。

(3) 安息日についての主の御言葉

ここでは、人間が安息日に左右されてしまっているわけで、人間が安息日の奴隷ということになりかねない。そういう人々に対して、主は「安息日は人間のために設けられたのです。人間が安息日のために造られたものではありません」(マルコ2:27)と言われた。

今日の個所において、主はさらに積極的に安息日の意味について教えておられる。

《わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです》

そこで、まず安息日が制定されたモーセの律法を見つめてみる。ここでは、このように教えられている。

《安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。

七日目は、あなたの神、【主】の安息日である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。あなたも、あなたの息子や娘も、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、またあなたの町囲みの中にある寄留者も。

それは【主】が六日間で、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造り、七日目に休んだからである。それゆえ、【主】は安息日を祝福し、これを聖なるものとした》(出エジプト20:8-11)

ここに出て来るところによれば、安息日制定の根拠として、神が天地を創造された時、7日目に休まれたから、7日目を安息日として休まなければならないと言われている。神が休まれたとはどういうことなのか。ここが実は重要な鍵となるところである。

神は「創造のみわざ」を6日間でなし終えられた。だから、「創造のみわざ」はそれで終わったわけで、神は「創造のみわざ」をそれで休まれた。

しかし、「創造のみわざ」を終えて休まれたが、それに続く「摂理のみわざ」は休むことなく、続けておられる。

「摂理のみわざ」というのは、ご自分が造られたこの世界を保持し、支配する働きのことである。神はその意味では、「今に至るまで働いておられ」るのである。

それだけではない。神が今日までずっと働いておられるのは、ただ単に「摂理の働き」だけのことを指しているのではない。もっと深い意味がある。

(4) 本当の安息日は何か

旧約時代、安息日の律法が制定された時、それは何を意味していたのか。それは、私たち人間が肉体的にも霊的にも、本当の憩いを得るのは、神による以外にはないということを教えるものであった。旧約時代は実物教育の時代であるから、一週間のうち1日を休むという形で示された。

旧約時代の安息日は、それが指し示している「本当のもの」に意味があった。次のように教えられている。

《こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは祭りや新月や安息日のことで、だれかがあなたがたを批判することがあってはなりません。これらは、来たるべきものの影であって、本体はキリストにあります》(コロサイ2:16-17)

今日、私たちキリスト者は、一週間に1日だけ憩いを得るのではなく、時々刻々、主イエス・キリストの中に「本当の憩い」を得ることができる。

その「本当の憩い」というのは、「キリストによって成し遂げられた救いのみわざに基づくもの」である。キリストがこの38年間病気で苦しんでいた人をいやされたのも、実は「その救いのみわざ」と別物ではない。主イエス・キリストは、父なる神から遣わされて来たお方として、そのことをしておられた。

ユダヤ人の指導者たちは、キリストが安息日の律法を廃止しようとしておられたことと、ご自分が神の権威を持ってそれをしようとされたことを知って、冒涇者として、殺そうとした。

(5) 日曜日をどう過ごすべきか

ところで、今日の私たちは、どのような日曜日の過ごし方をしたらよいのか。安息日はすでにイエス・キリストにおいて成就したのであるから、日曜日を安息日として守るとするのは、正しい過ごし方ではない。

それでは、未信者と同じように、何をしてもよいのか。そうではない。私たちキリスト者にとって、日曜日は主日である。「私たちの主が復活されたことを記念する日」である。主の復活がなかったかのような生き方をすべきではない。復活の主をあがめ、礼拝することを通して、復活の主を証しすべき責任が与えられている。

救い主によって霊的にいやされ、生まれ変わらせていただいた者として、積極的に復活の主を証しするために主日を用いるべきである。主日だけではなく、すべての日において、復活の主をあがめ、復活の主が現に生きておられることを積極的に証ししなければならない。